

甲状腺外科草子 34

百人一首の逸話：光孝天皇

杉野 圭三

百人一首の十五番は光孝天皇の歌である。

君がため 春の野に出でて 若菜つむ わが衣
手に 雪はふりつつ

清々しい春の遊びを表現し、高く評価され、古今集には、「皇子におはしましける時に、人に若菜たまひける御歌とある」。



光孝天皇



仁和寺の木像

光孝天皇は 55 歳で即位された苦勞人で、多くの面白い逸話が残されている。

逸話その一：「大鏡」

光孝天皇が時康親王時代、大饗の時に配膳の者が雉の足を尊者の前に置くのを忘れ、あわてて親王の前の雉を取って移した。その時、親王は前の燈火をそっと消した。藤原基経は当時末席で皇族たちの様子を見ていたが、親王の慈愛の深さに感動し、20 年後の皇位決定時の参考にしたとされる。

昔は親王たち必ず大饗につかさせ給ふことにて、わたらせ給へるに、雉の足は必ず大饗に盛るものにて侍るを、いかがしけむ、尊者の御前にとり落としてけり。配膳の親王（光孝）の御前のを取りて、惑ひて尊者の御前に据ふるを、いかがおぼしけむ、御前の御殿油をやをらかい消たせ給ふ。

逸話その二：「古事談」

藤原基経（関白、836－891）が、陽成天皇の物の怪がひどく、後継決定ため親王たちの様子を見ると皆慌てていたが、時康親王（光孝天皇）だけは動ぜず座り、この人こそ帝位につく人と思った。

破れたる御簾の内に、縁破れたる畳におはしまし

て、本鳥（もとどり）二俣に取りて、傾き動く気なくおはしましければ「この親王こそ帝位に即き給はめ」～

逸話その三：古事談

親王時代に商家から多くの借用をし、即位後返済を迫られ、返却された。

親王の間、多くの町人の物を借用す。御即位の後、各参内して責め申す。よって、納殿の物を以て、しかしながら返し与えらる。

逸話その四：徒然草（第七十六段）

清涼殿の黒戸御所は、光孝天皇が即位した後、かつて一般人だった時の自炊生活を忘れないように、いつでも炊事ができるようにした場所である。薪で煤けていたので、黒戸御所と呼ぶのである。

黒戸は、小松の帝、位に即かせ給ひて、昔、直人にて御座（おは）しましし時、正無（まさな）事せさせ給ひしを忘れ給はで、常に営ませ給ひける間なり。御薪（みかまぎ）に煤けたれば、黒戸と言ふとぞ。

光孝天皇が即位した年号が「仁和（にんな）」であったため、仁和の帝、小松の帝とも呼ばれた。光孝天皇によって「西山御願寺」と称する一寺の建立が発願されたが、仁和南海地震後の残暑厳しい中で健康を害し、地震の 26 日後に 58 歳で亡くなられた。寺は翌年、第 59 代宇多天皇により、仁和 4 年（888 年）に完成。寺号も仁和寺となった。



仁和寺の枝垂れ桜



御室桜

我が家では、春先には雨降りでも庭の三つ葉を摘み、詩を添えて妻に差し出すのが年中行事である。

君がため 春の庭に出で 三つ葉摘む わが衣手に 雨はふりつつ （本歌取りか？ 盗作か??）

（一甲状腺外科医の徒然なる随想）

2022 年 7 月 1 日